

説教 『肉と血と霊』山本 護 牧師
聖書 箴言 30：4／ヨハネ福音書 6：60～63

イエスの言葉は人々の内に波風を立てる。ほどよい波風ならいいのだが、それがきついと弟子たちまで混乱し、離反さえ起こった。イエスが「わたしは命のパンである(ヨハネ6:48)」と自己表明すると(6:49～51)、敵対するユダヤ人は嫌悪を露わにし、ひと騒動になった(6:52)。その「火」へ油注ぐがごとくにイエスは語る。「はっきりしておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない(6:53)」。すると、どうだろう。「命のパン」という比喻なら受容できた弟子も、「人の子の肉を食べ、血を飲む」というグロテスクな言葉を聞くと、ひどく動揺し始めた。

「弟子たちの多くの者がこれを聞いて言った。〔実にひどい話だ。だれが、こんな話を聞いていられようか〕(6:60)」とつぶやき、そしてつまずいた(6:61)。「このために、弟子たちの多くが離れ去り、もはやイエスと共に歩まなくなった(6:66)」。福音書に散見される弟子たちのつまずきは、たいてい無理解くらいで持ち堪えるが、この場面では「弟子たちの多く」がイエスから離れ去ってしまった。

愛の人「イエス様」の癒しや赦しでは、誰もが胸を熱くする。ところが、その「愛」が究極的な形を為す時には、誤解や混乱や拒絶が起こる。それでは「究極的な愛」とは何か。「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたその人の内にいる(6:56)」。これがキリストと弟子との愛の結びつき。聖餐式は、それをくり返し想起させる私たちの「十字架体験」。十字架はただの象徴に留まらず、具体的で、私たち一人ひとりを神の永遠性に結びつける(6:58)。

私たちにとっても「肉と血」はグロテスクだ。「イエス」という人物を理解できたとしても、白日のもとに現された十字架の御姿(肉と血)なしに、「キリスト」のことは分からない。十字架の時には弟子のすべてが霧散したが、それ以前、十字架をまっすぐに言い表す「肉と血」の言葉でも「弟子たちの多くが離れ去った(6:66)」。弟子たちは、自分が期待するメシア(救い主、解放者)像を、鮮度が低くとも固定されうる教えを求めていた。自在に吹き抜けるキリストの霊を、自分の中心にはしなかった。

「命を与えるのは『霊』である。肉は何の役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、命である(6:63)」。私たちがキリストの「肉を食べ、血を飲む(6:56)」だけでは、恵みの実際を現しえない。「霊・命」であるイエスの言葉に押し出され、私たちが波立たせられてこそ、現れる。

「風(霊)は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである(3:8)」。思いのままに吹く霊が私たちを波立たせ、命が輝きを放つ。固定された「肉は何の役にも立たない(6:63)」。活きのいい鮮度をもたらす霊こそが真の「命を与える(6:63)」。私たちは霊の風に吹かれ、隠されている未知なる命を現す。命とは何か。霊に吹かれることで、現される何かだ。命は、恵みであると同時に神の創造。教会はそれに与り、それに関わり、それを担う。教会の身体である私たちは、「命のパンを食べ、永遠に生きる(6:58)」。

「天に昇り、また降った者は誰か。その手の内に風を集め、その衣に水を含む者は誰か(箴言30:4)」。



《おまけのひとこと》

流れない水が腐るように固定された教えは劣化する 時は刻々と過ぎ 霊は思いのままに吹いているからだが幸いなるかな キリストが私たちを波立たせる さざ波の時があり 大波の時がある